

激しい攻撃行動を示す強度行動障害者に対する支援(1)

-FTスケジュールによる行動障害の軽減-

The Treatment for Severe Disturbing Behavior: FT Schedules and aggression

○奥田 健次・竹澤 律子・川上 英輔

Kenji OKUDA, Ritsuko TAKEZAWA and Eisuke KAWAKAMI

桜花学園大学人文学部 赤穂精華園 赤穂仁泉病院

Ohkagakuen University, Akoseikaen, Ako-jinsen Mental Hospital

1. 目的

激しい行動障害に対する支援方法として、行動分析学によるアプローチが有効であることが認められている(奥田, 2001)。特に、自傷や攻撃行動への対応方法として、FTスケジュールを用いた介入(NCR)は、数多くの研究(Lalli, Casey, & Kates, 1997; Vollmer et al., 1993; 1998 など)によってエビデンスが確立されている。本研究では、攻撃・破壊行動の激しい強度行動障害者に対して、非随伴強化法(NCR)を利用した介入の効果について検討を行う。

2. 方法

1) 対象者: 他者に対して「叩く」「爪を立てる」「つかむ」などの激しい攻撃行動がみられ、他施設での支援が非常に困難となり、知的障害者更生入所施設の強度行動障害特別処遇棟に入所してきたばかりの自閉症男性(18歳)を対象とした。また、放尿便や弄便も激しく、スタッフがトイレへの誘導支援を行う際に、スタッフへの激しい攻撃行動がみられた。

2) 支援目標: トイレ誘導支援中(トイレまでの移動場面と5分間のトイレトレーニング場面)の攻撃行動を減らし、スタッフの支援に適切に応じられることを支援目標とした。

3) 支援手続き: FTスケジュールを用い、1日1回トイレトレーニング(TT場面)を実施した。好みの事前アセスメントにより、氷とプルーンを好子として用いた。FT10秒から始め、一定の時間間隔で好子を提示した。各介入フェイズの達成基準は、移動・TT場面ともに攻撃行動が10セッション以上連続して消失することとした。基準達成後、時間間隔を伸ばし、好子提示までの時間を長くした(基準変更デザイン)。なお、FT20秒が達成基準に達したところでこの介入を終結し、声かけによる誘導支援に戻した。

3. 結果

移動場面での攻撃行動の推移をFig. 1に、TT場面での攻撃行動の推移をFig. 2に示した。アセスメント時は、移動・TT場面ともに5回以上の攻撃行動がみられ

たが、支援開始後はそれが激減した。支援終了後、声かけによる誘導支援のみでの2か月後の維持測定で、攻撃行動は生起していないことが確認された。

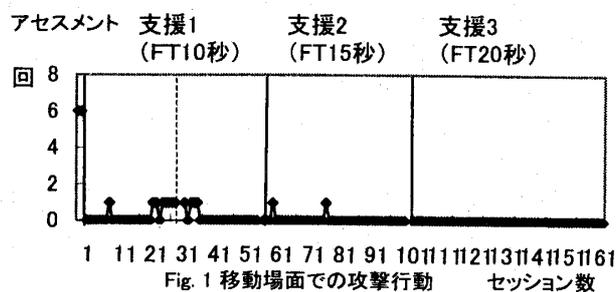


Fig. 1 移動場面での攻撃行動 セッション数

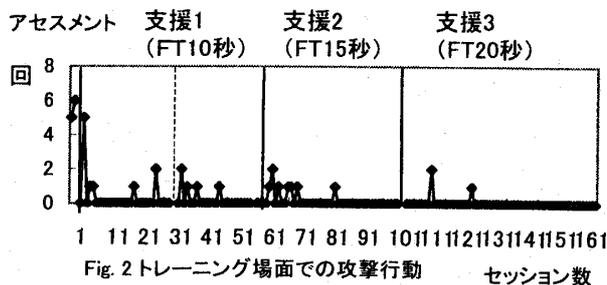


Fig. 2 トレーニング場面での攻撃行動 セッション数

4. 考察

支援開始直後から、スタッフに対する攻撃行動がなくなったことから、トイレ支援が容易になった。また、時間間隔を変更した直後に、若干の攻撃行動が生起することもあったが、すぐに攻撃行動はみられなくなった。これらのデータのトレンドは、先行研究と同等であり、本介入の強力な効果を示している。また、攻撃行動の自発に対して、好子を受け取って食べる行動を強化したことは、DRIの機能もあったと考えられる。

なお、本研究では、福祉現場のニーズや制限により、実験的介入による機能分析(Iwata, et al., 1982)は実施困難と考え、攻撃行動や弄便の機能分析は実施しなかった。それにもかかわらず、聞き取りと行動観察による好子のアセスメントだけでも十分な介入効果を示すことができた。このことから本研究は、現場への応用可能性が高い支援方法を提案しているといえる。